

第2 教育研究団体の意見・評価

① 一般社団法人 情報処理学会

(代表者 森本 典繁 会員数 約21,000人)
TEL 03-3518-8374

1 前 文

「令和7年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト出題教科・科目の出題方法等」において、『情報Ⅰ』については、試験時間60分、配点100点で、「出題方法（出題範囲、出題科目選択の方法等）」は空欄であるので、選択問題はなく「情報Ⅰ」の学習指導要領の内容を総合した出題範囲で出題されることが示されている。また、「令和7年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」において、問題作成の基本的な考え方、構成・内容、分量・程度、表現・体裁や問題作成における配慮事項が示され、『情報Ⅰ』に関しては、「日常的な事象や社会的な事象などを情報とその結び付きとして捉え、情報と情報技術を活用した問題の発見・解決に向けて探究する活動の過程、及び情報社会と人との関わりを重視する」ことが明記されている。

これらの方針に従い、第1問～第4問（全問必答）として出題された。2 では、設問ごとに、評価結果を述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

試験問題の評価結果をそれぞれの設問ごとに述べる。

第1問 問1～問4までの4問で構成されており、基本的には知識と技能を問う小問及び中間の集合である。学習指導要領に記載される「情報Ⅰ」の4つの各分野から偏ることなく出題されている。問1以外の問いはある程度の思考力も求める内容となっており、知識がしっかりと身に付いていることを確認する設問として望ましい。説明はやや長めであるが難易度は決して高くはない。問1～問4のいずれの問いとも設問及び解答群を含めてそれぞれ2ページに収められていて適切な配置になっている。配点は問1に4点（採点項目2個）、問2に6点（採点項目2個）、問3に5点（採点項目2個）、問4に5点（採点項目2個）となっている。

問1 a・bの小問2問構成であり、aは著作権法の理解を確認する問題である。著作権（財産権）の保護期間、著作物の利用、著作権（財産権）の例外規定の基本的な理解のほか、選択肢⑩の解釈には作者の権利と被写体である有名人の権利の違いを正しく認識することが求められる。bはベクタ画像とラスタ画像の性質に関する基本的な知識の理解を確認する問題である。

問2 クラウドサービスの地図データを題材とした画像データに関する問題である。様々な縮尺の地図データの準備方法と、(ズーム) レベルというパラメータの定義を示し、レベルと縮尺の関係、及び、レベルを変えた際のデータ量の変化について問うている。レベルの定義を理解できれば、画像データに関する基本的な計算で正答できる。現実のクラウドサービスの仕組みに基づいた問題設定であり、身近で興味を引く題材である。ただし、難易度に対して説明が長い。地球に由来する要素を排除するなど、多少簡略化して説明を短くしてもよかったのではないかな。

問3 表を用いた手書きによる予約管理をコンピュータによる管理に置き換える話題を通してデータの整理手法の理解を確認する問題である。前半の問いでは、問題文中で説明された

手書きによる表の扱い方についての理解を確認している。後半では、コンピュータ向けに改められた表を使い、手書きの場合と同等の操作を行う方法について問うている。いずれの表も使い方は易いので問題文を的確に読み解けば難なく正答できる問題である。

問4 ラーメンの注文内容を題材とし、情報を数値で表現する方法の理解を確認する問題である。4種類あるトッピングの注文を10進法の十の位と一の位の2桁で表現する必要があるという設定になっている。小問aでは、解答選択肢に示された数値を試行錯誤しながら調べることで正答にたどり着くこともできる。一方、小問bを正答するには、選択の有無を表す情報の最小単位が1ビットであることに気付く必要があり、小問a・bそれぞれの難易度が適切に設定されている。

第2問 AとBの2つの問いで構成されており、各問い・空欄の配点は適切である。

Aは、問1～問5までの5問で構成されており、受験生にとって身近であるインターネットを利用した会員登録を題材として、情報セキュリティや個人情報の保護について問うている。学習指導要領の(1)「情報社会の問題解決」のイ(イ)「情報に関する法規や制度、情報セキュリティの重要性、情報社会における個人の責任及び情報モラルについて理解すること」、イ(イ)「情報に関する法規や制度及びマナーの意義、情報社会において個人の果たす役割や責任、情報モラルなどについて、それらの背景を科学的に捉え、考察すること」に対応する。PさんとQさんの会話形式の問題であり、適切な分量で受験生にとって身近な題材であることを印象付けている。

問1は、使用できる文字種と文字数からパスワードのパターン数を計算する問題である。パスワードの文字数を増やすことでより安全になることを意識させるように出題されており、適切な問題である。

問2は、会員登録時または会員登録したサイトを利用する際に留意すべき点を問う標準的な問題である。

問3は、認証方法の分類と複数の認証方法を利用することによる利点を問う問題である。Eは、問題文の中で認証コードと各認証方法が説明されており、情報セキュリティに関する知識がなくても正解できる可能性がある。

問4は、各会員証の方式が不正な複製を抑制できるかを問う問題であり、適切な問題である。

問5は、個人情報保護の方針の個人情報の利用目的を踏まえ、個人情報の各利用事例が適切かを問う問題である。個人情報保護の方針を確認することの重要性に気付かせる、適切な問題である。

Bは、問1と問2の2問で構成されており、迷路ゲームを題材としてデータ構造とアルゴリズムについて問うている。学習指導要領の(3)「コンピュータとプログラミング」のイ(イ)「アルゴリズムを表現する手段、プログラミングによってコンピュータや情報通信ネットワークを活用する方法について理解し技能を身に付けること」、イ(イ)「目的に応じたアルゴリズムを考え適切な方法で表現し、プログラミングによりコンピュータや情報通信ネットワークを活用するとともに、その過程を評価し改善すること」に対応する。

問1は、迷路の構造を表現するデータ形式の違いにより、アルゴリズムやデータ量にどのような違いが生じるかを問う問題である。アルゴリズムの理解力及び思考力を問う、適切な問題である。

問2は、迷路内の各マスから財宝のあるマスへの移動方法を探索するアルゴリズムとデータ表現について問う問題である。問1同様、SさんとTさんの会話形式で出題されており、アルゴリズムの理解力及び思考力を問う問題であるが、問題数の割に問題文が長く、難易度がやや

高い印象を受ける。例えば S さんの最初の発話を削除するなどし、問題文を短くしてもよかったのではないか。

第3問 生徒各人のごみ収集作業結果の入力から、全体のごみの収集状況を集計する作業を題材とし、データ収集、分析に対するプログラミング能力を測る問題である。取り扱うデータを配列にてモデル化し、得られたデータの分析を行い、さらにプログラミングの改善を行う内容である。学習指導要領や同解説の「プログラミング」に対応するだけでなく、「モデル化とシミュレーション」や「データの活用」にまで関連する幅広い内容を含んでおり、情報の試験問題として推奨すべき題材の取扱い方である。現実活動を題材とするので、状況説明のための説明文を理解し、解くべき問題を把握する思考力・判断力・表現力も問うている。

試験問題の形式はどの問もプログラムの変数や式を問う穴埋めであり、適切である。

作成するプログラムは二重の入れ子まで扱っており、また、配列の利用法に対する十分な理解が必要であり、問題の程度としては適切である。

設問数は冊子のページにうまく収まるように配慮されており、適切である。

配点については、繰り返しの数を指定する簡単なものが1点、難易度が一番高いものが3点、残りは2点と与えており、適切である。

以下、問いごとに意見を述べる。

問1 配列へデータを入力する際の配列要素を適切に指定できる力を問うている。

文章で与えられた作業手順を適切にプログラム化できるかを問うており、読解力や表現力が必要である。配列を扱うための基本的な問題であり、難易度は低い。最初の間としては適切である。配列の添字は1から始まると明記して適切である。配列の上限が40であることは図から分かるが、明記しておく方がよいであろう。

問2 配列の要素に応じて種類ごとの総重量を求めるプログラムである。繰り返しの中にif文が並ぶ二重の入れ子で構成される制御構造を理解できるかを問うており、適切である。配列から合計を求める基本的な問題の応用であり、難易度としては高くない。演算子の説明などが適切に与えられている。解答群の与え方も適切である。

問3 プログラムの仕様変更による改善についての対応能力を問うている。問1、問2で示されたプログラムのそれぞれの改善版を作らせている。すでに示されたプログラムの指定された行を変更する形で仕様変更を行うものであり、紙面を見て回る際のわずらわしさはある。前半では、配列の探索を用いて、入力文字列から種類番号への変換手順が理解できているかを問う。この際、`Namae` 配列に含まれない文字列を入力した場合の結果が未定義なので、何らかの説明があった方がよいであろう。後半では、種類番号から種類名への変換を理解できるかを問うている。配列の扱いに慣れていれば難しくはない。代入文で変数の値を増加する文に対する設問が3つあるので、試験問題としての識別力を高めるには別の空欄に変えることを考慮するとよい。

第4問 第4問は「データの活用」についての問題である。問1～問5までの5問で構成されており、問1は相関係数の知識・理解に関する問題、問2と問3は散布図行列を読み取る問題、問4は散布図を読み取る問題、問5は回帰直線の理解に関する問題である。相関係数、散布図、回帰直線といった、データの活用に欠くことのできない要素を扱っていることは、妥当だと考える。ただ、データの活用において扱うべき指標をもう少し追加して問いに設定することも考えられる。「高齢化」といった高校の探究学習でも取り扱われるような題材を扱っていることは適切だと考える。

以下、問ごとに意見を述べる。

- 問1 相関係数の意味を知っていないと回答できない知識問題である。基本的に備えておくべき知識の有無が確認できる問いとして、適切な内容の問題である。
- 問2 散布図行列を読み取る問題である。散布図行列は、情報サンプル問題第3問や、試作問題『情報Ⅰ』（参考問題）第4問でも示されており、唐突感はない。散布図行列の意味が分かっている受験生にとっては難しくない問題だが、散布図行列に馴染みのない受験生は若干戸惑うかもしれない。ただし、問2bにおいて、相関係数の符号が異なっていることを示して、難易度を下げている工夫は評価できる。
- 問3 問2の続きとして、散布図行列に項目を追加して問題を設定している。問題文と散布図行列に1ページを費やした割に、設定された問いが1つであることと、この散布図行列が理解できなくても、一般知識で解答できてしまう問いになっていることには、改善の余地があると考えられる。また、ここでの検討結果から仮説を立てているが、この仮説の検証がこれ以降においてなされていない。そうであれば、「過疎地では、高齢者の割合が高く、面積当たりの病院数も少ない」という、ここから読み取れることを解答させるということも考えられる。
- 問4 散布図を読み取る問題である。**力**については、問4の中に設定されているものの、問題の内容的には問3の中で扱われた方が自然とも考えられる。**キ**と**ク**については、散布図を見れば解答できる問題であり、比較的平易に解答を選択できる。誤答選択肢を工夫することでもう少し難易度を上げることも考えられる。
- 問5 統計ソフトウェアを用いれば、簡単に回帰直線を求めることができるが、その意味を理解しているか問う問題である。この問いは、問題文の前半や図を読み取らなくても、示された回帰直線に値を代入するだけで解答を得られる、単純な計算問題にとどまっている。第4問の最後の問いということであれば、もう少し思考力や判断力を必要とする難易度の高い問題である方が望ましいと考える。

3 総評・まとめ

「情報」の受験者約30万人で、追・再試験は600名弱が受験した。「情報Ⅰ」の幅広い領域から、「社会や身近な生活の中の題材、及び受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事例や事象について、情報社会と人との関わりや情報の科学的な理解を基に考察する力を問う問題」や「問題の発見・解決に向けて考察する力を問う問題」が出題されており、適切であったと言える。

「情報Ⅰ」の出題教科・科目の問題作成の方針は、事前に公表された「令和7年度大学入学選抜に係る大学入学共通テストの出題教科・科目の問題作成方針に関する検討の方向性について」「『情報』の問題作成方針に関する検討の方向性」を踏襲したものである。問題作成方針に関する検討の方向性が公表された際、試作問題も公表されていたが、本試験の大問構成や分量は試作問題と概ね同じで、受験生が戸惑うことはなく、最初の「情報Ⅰ」の出題としては妥当であったと言える。追・再試験の問題は本試験に比べて全般に文章量が多いが、適切な分量には収まっている。問題中のプログラム表記を、特定のプログラミング言語ではなく受験者が初見でも理解できる共通テスト用プログラム表記が用いられており、授業で学んだプログラミング言語による有利不利が出ないように配慮されている。共通テストの出題形式・解答形式の制約の中、情報と情報技術を活用した問題の発見・解決に向けて探究する活動や情報社会と人との関わりにしっかりと取り組んだ受験生の思考、判断、表現する力を問う作問に奮闘している問題作成関係者に敬意を表す。

4 今後の共通テストへの要望

「情報Ⅰ」では、「情報に関する科学的な見方・考え方を働かせ、情報技術を活用して問題の発見・

解決を行う学習活動を通して、問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用し、情報社会に主体的に参画するための資質・能力」を育成することを目標としている。各領域で、情報と情報技術を活用して問題を発見しその解決に向けての過程を繰り返すことが期待されている。授業の中でしっかりとした実践に取り組むことで身に付く「情報社会と人との関わりや情報の科学的な理解を基に考察する力」や「問題の発見・解決に向けて考察する力」を測る出題となっている。今後もこのような問題を作成していくことを、強く期待している。

② 日本情報科教育学会

(代表者 森本 康彦 会員数 約350人)

TEL 049-266-4516

1 前 文

今年度の共通テストより、新たな教科として「情報」が追加され、科目として『情報Ⅰ』が導入された。教科が追加されるのは、共通一次試験・センター試験・共通テストの歴史の中で初めてであり、歴史的な出来事と言えよう。本学会においては、学会が設立されて以来の念願がついに叶ったと言っても過言ではない。

共通テストでは、各教科・科目の特質に応じた学習過程を重視し、受験者が高等学校で身に付けた知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等を評価するものとされている。大学入試センターの「情報Ⅰ」の問題作成方針では、「社会や身近な生活の中の題材、及び受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事例や事象について、情報社会と人との関わりや情報の科学的な理解を基に考察する力を問う問題などとともに、問題の発見・解決に向けて考察する力を問う問題も含めて検討する」とした。そのような中、「情報Ⅰ」のテストでどのような問題が出題されるかが、教育界だけでなく全国の注目の的となっていた。

「情報」の受験者数は 594 人であった。問題は、社会や身近な生活の中の題材を用い、ただ知識を問うのではなく、問題文から場面を読み解き、適切に思考・判断する過程を通じ問題解決を図るための力を問うものであった。これは、大学入試センターが事前に示していた問題作成方針通りと言ってよいだろう。前例のない初めての実施となることから、受験者の間には不安が広がっていただろう。しかし、本試験と同様の問題構成で、大学入試センターの問題作成方針通りの問題が出題されたことで、多くの受験者が安心して自身の力を発揮し解答できたのではないだろうか。

以上のことを踏まえ、ここでは、次の観点から総合的に評価を行った。

- (1) 出題内容や範囲は偏ったものになっていないか。
- (2) 問題の構成（設問数、配点等）や難易度は適切か。
- (3) 問題の設問形式は適切であったか。また、文章の表現や用語、図表などは適切であったか。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

出題範囲は、本試験と比べると4つの学習内容のうち「コンピュータとプログラミング」の内容が少し多くなっている。しかし、ひどく偏っているということではなく、全体のバランスを考えた問題構成になっていると言える。

第1問 問1は知識を問う問題、問2～4は、知識を活用し思考・判断する問題が出題されており、適切な問題数や配点が設定されている。また、いずれの問題も見開きの各2ページで構成され、受験者が解きやすい配慮がなされており全体として表現・形式ともに適切である。

問1 a は著作権等に関する問題である。①については著作権だけでなく肖像権やパブリシティ権も連想させる内容であり正誤の判断が紛らわしくなる受験者がいると思われるが、②が明らかに誤りと判断できるので、正解を導くのに問題はなく平易な問題である。b は、画像のデジタル処理に関する問題である。各形式の基本的な性質を知っていれば明確に真偽が判断できる選択肢であり、やや易しい問題である。分量・程度ともに適切である。

問2 地図データを題材とした問題である。問題文と図を用いて、問題の意図を具体的に理解しやすいように誘導しており、概念さえ理解できれば特に複雑な計算をすることなく正解を

導ける良問である。分量・程度ともに適切である。

問3 生徒に身近な事例として部活動の施設予約を題材とした問題である。作業をイメージしやすいホワイトボード上での手順・作業を例として挙げ、このタスクを表計算ソフトで運用する場合の基本的な操作・考え方を問うている。分量・程度ともに適切である。

問4 ラーメン屋の注文のデジタル表示を題材にしており、思考力だけでなく技能も要求される問題である。前半では、①～③を実際に計算（シミュレート）することで正解を導くことができる。後半は、前半をヒントにして考えることができるが、同様の学習経験がない受験者にとっては難しく感じたと推測される。

第2問 AとBで構成されており、Aは情報セキュリティと個人情報保護の問題、Bはモデル化とシミュレーションの問題である。

A ファンクラブサイトへの会員登録を進めていく場面で、情報セキュリティと個人情報保護についての知識、思考力・判断力・表現力を問う問題である。

問1 パスワードの桁数とパターン数の問題である。選択肢が式の形になっており、選択肢の数も適切である。平易な問題ではあるが、程度・形式・分量ともに導入としては適切である。

問2 会員登録の場面から情報セキュリティを考える問題である。常識の範囲で正解を選ぶことができるため、内容・形式を工夫し、難易度を少し上げるとよいと考えられる。

問3 パスワードと認証コードについての知識を問う問題である。現在、高校生のスマートフォン普及率は高く、また生活体験の中で多要素認証を要求される場面も多くあることから、受験者にとって a, b ともに平易な問題と考えられる。

問4 会員証の不正コピー・利用を抑制させる効果が期待できない方式を判断する問題であり、よく練られた良問である。ただし、PDF ファイルはコピーや印刷ができないように作成することも可能のため、より誤解のないような選択肢や表現が望まれる。

問5 ファンクラブの個人情報保護の方針から、示された各ケースが問題となり得るかの知識と思考力・判断力を問う問題である。普段見逃しがちなプライバシーポリシーを問題としている点では評価できるが、常識で判断できる事例もあり、容易に正解を選べるため、事例やプライバシーポリシー、問題の場面設定にもうひと工夫されるとよいと考えられる。

B 迷路を使ったゲームを作るという場面設定からモデル化とシミュレーションが展開される問題である。マスに数を割り当てて迷路を作り、さらにデータ量との関係などを題材とした点はとても興味深い問題と言える。

問1 マス目を2つの2進表記で表し、それらの情報量や移動の表現を考えさせる問題である。興味を引く題材で、表現によりデータ量が変わるという点を問題としている点が良いと思われる。Tさんの「仮想的なマス目」作成方法で、ややあいまいな表現が見られるため、もう少し丁寧な説明が望まれる。程度は適切であると考えられる。

問2 コンピュータが操るキャラクターをどのように動かしていくかという仕組みを問う問題である。説明文が多く、難易度がやや高いようにも感じられるが、丁寧に読み、内容を理解することで正解を導くことができる。程度は適切であると考えられる。

第3問 生徒全員のごみ拾いの結果を入れ物や種類別に配列に格納し、種類ごとの総重量を表示する流れを考察させる問題である。本試験と同様に、受験者が初見でも理解できる大学入試センター独自の日本語でのプログラム表記を用いており、受験者の混乱はなかったと思われる。内容としては、学習指導要領の「コンピュータとプログラミング」の範囲に十分対応しており、配列を連携させながらループと分岐を組み合わせる点は、本試験の第3問と方向性が近い。しかし、本問では最大7種類のごみの名称を文字列で扱う拡張例が含まれており、本試験と比べ

ると難易度は高いと思われる。全体として問題数や配点、表現・形式ともに適切である。

問1 出席番号 n を添字として Iremono・Shurui・Keiryō に値を代入する問題である。プログラム構造が単純なだけに、容易に解くことができる問題であるが、導入としては、分量・程度ともに適切である。

問2 入れ物と可燃/不燃の二択に基づき総重量を加算するための if 文を補完する問題である。配列の添字を使いこなし、条件を正しく比較する論理性が試されるところであり、一つでも空欄を取り違えると全体の集計が崩れてしまう点でやや難しい問題と考えられる。

問3 ごみの種類を 7 種類に拡張し、生徒のごみ拾いの結果を配列に格納するプログラムに変更する問題である。文字列と数値の対応付ける図 5 のような処理は、単純な if 文連鎖に比べれば洗練されている一方、「もし Namae[j] == meishou ならば Shurui[n] = j」のような繰り返し内での一致判定を正しく実装しないと、意図した種類番号を取得できない恐れがある。また、Goukei 配列の更新と名称表示のループで、添字をどう参照するかを誤れば不正な値を上書きする事例も想定される。丁寧に図やプログラムを読み解かなくてはならないやや難しい問題ではあるが、情報Ⅰの学習内容（配列の活用や繰り返し構造の柔軟な利用）を具体的に問うという点では有意義な良問と言える。問2と同様に、プログラミングによる思考力・判断力を問う問題としては、分量・程度ともに適切である。

第4問 「高齢化」をテーマに、データを探究的に分析する問題である。相関係数の性質について問う問題、散布図や散布図行列及びヒストグラムを読み取る問題、単回帰分析により推定値を求める問題があり、多面的にデータの活用について問う形式となっている。また、「人口密度」により 2 グループに分けて分析する手法が出題されるなど、多面的にデータを分析するような問題になっており、内容・範囲ともに適切である。各問は見開き 2 ページ内に収まるように構成されており、文章や図を見やすく配置して受験者にとっては解答しやすい配慮がなされている。本試験より難易度的には平易な問題構成になっていると思われる。

問1 相関係数の値が持つ意味、及び、散布図との関係について問う問題である。相関係数の数値が示すことについて正確な知識が求められる。分量・程度ともに適切である。

問2 散布図行列を読み取る問題である。散布図行列について記述された教科書が少ない中、3 行 3 列の比較的小さい散布図行列を示して丁寧に説明を加えていることから、初めて散布図行列を見る受験者にとっても図を理解することはできたと考えられる。分量・程度ともに適切である。

問3 散布図行列が 4 行 4 列と前問より大きいものになり、散布図行列上に示された相関係数を読み取り、その値の意味を考える問題である。社会問題に関心を持っていれば散布図行列から相関係数を読み取らなくても予想できるものとなっており、平易な問題と言える。

問4 ヒストグラムの読み取りと散布図上からの分布の読み取りに関する問題である。単純な読み取りで解答ができる平易な問題である。文中で示したグループ分けの基準値を考えさせるなど、思考力等を測ることができる問題にするための工夫があるとよいと考えられる。

問5 単回帰分析において、回帰直線の方程式を用いて予測値を求める問題である。単に「人口密度」に与えられた値を代入することで予測値を求められるため、多くの受験者は容易に解答できたと考えられる。内容や形式等を工夫されるとよいと考えられる。

3 総評・まとめ

本試験と比べ、少し難易度が高いと考えられる。しかし、全体としては、適切な分量・程度だったと判断される。前文で述べたとおり、ただ知識を問うだけでなく、問題文から場面を読み解き、

必要な知識を活用し、適切に思考・判断して問題解決を図るための力を問う問題が多数見られた。

第1問の問1のbは、単に知識を当てはめれば解けるというものではなく、ベクタ形式とラスタ形式のデータ容量の違いを、具体的にピクトグラムを題材に考えさせることで誤った判断をしないように作られている。これは、既有的知識を活用し、思考・判断させるための選択肢として適切であり、知識を問う問題の出題方法として、これからも参考になる良問である。問3は、「情報Ⅰ」のデータベースに関する学習内容の限られた範囲内で、データをテーブルで扱う基本的な概念や考え方を問うている良問である。今後、さらに発展させたデータベース上で情報の活用を問う問題へ展開させるための布石となるだろう。問4は、基本的な知識を問う問題ではなく技能を問う問題であるが、受験者によっては初めて目にするタイプの問題の可能性がある。問題としては複雑ではないが、正解を求める力は応用レベルに近いと考えられ、やや難しい問題になっている。第1問として出題するならば、後半への誘導をもう少し丁寧にするとういと考えられる。

第2問のAは、問題のテーマとしてはよいが、非常に容易に判断できる問題も多く含まれているため、選択肢を工夫するなど全体的にもう少し難易度を上げてよかったと思われる。

第2問のBは、場面設定など文章が多くやや難しく感じるが、問題をよく読み適切に考えることで正解を導くことができる良問である。しかし、問題文の文章量が多く、受験者は多くの時間をここに費やしたと推測される。特に、最後に問うている「ソ」は、選択式でなく当てはまる数字をマークさせる問題なので、全ての問題文を読み切る前にあきらめてしまう受験者がいてもおかしくはないと考えられる。受験者の解答のしやすさに配慮することも今後は必要と思われる。

第3問は、ごみの種類を増やし、名称を文字列で扱うなどの拡張性を示すことで生徒のプログラム設計や配列の操作ができるかを試す狙いがあると感じられる。一方で、文字列による名称と番号の対応付けや、バケツの重量を引く条件分岐など、やや煩雑に見える部分も少なくない。受験者は配列の添字を何重にも意識し、間違いなく組み合わせる必要があり、説明を流し読みすると簡単に取り違えを起こす設計になっているとも言えよう。しかし、実社会の「ごみの種類を増やす」例は現実的であり、プログラムを発展させていく流れを感じ取れる点は高く評価できる。高校「情報Ⅰ」で扱う繰り返し、条件分岐、配列の応用を、一連の集計処理という形で総合的に確認するには優れた問題であり、厳しい箇所はあるものの、授業での学びができていないのかを問う良問である。

第4問は、生徒達に身近な社会問題の一つである「高齢化」をテーマにした探究的な問題解決を意識した良問である。それゆえに現実に即した問題作成は難しさもあったと思われる。問3では、正答は「過疎化が進むと高齢化が進み、面積あたりの病院数が少なくなる」であり、社会問題に関心を持っていれば散布図行列から相関係数を読み取らなくても予想できるものである。現実に行っていることを数量的に捉えることによりデータとなり、データを読み取ることから現実が見えてくる。このような表裏一体の関係において、作問に苦勞をされていることは想像に難くないが、作問の工夫を検討いただきたい。問5では、単に「人口密度」に与えられた値を代入することで予測値を求められるため、難易度調整に苦勞をしている感じが読み取れるが、単回帰分析の出題にあたっては工夫が必要であると考えられる。また、第4問の全体を通して PPDAC サイクルをさらに意識して問題解決につながるような工夫がなされるとよいのではないかと考えられる。

4 今後の共通テストへの要望

報告書（本試験）の方に記載。